

秋の北アルプス

‘16/10/7, 8, 9, 10 登山 藤川昌寛

西穂高岳にアプローチが一番早くできるのは、新穂高ロープウェイを利用することだ。この乗り場口が新穂高温泉である。この新穂高温泉から東に穂高連峰から槍ヶ岳に続く山脈と、西に笠ヶ岳から双六岳への山脈の間にある小池新道を登る三泊四日の山旅だ。新穂高温泉で登山開始、歩き始める、大学時代に利用した中崎山荘は河川改修で対岸に移転していた、蒲田川の支流左俣谷沿に上る。中崎橋を通過し笠ヶ岳新道への分岐を左に見て左俣林道を進むとブナの原生林が見えてきた、黄色に紅葉している。

この原生林に囲まれていたのがわさび平小屋（標高 1400m）である。今夜は此处で泊まる。この小屋はブナ林からの湧水がおいしい、うれしいことに湯たっぷりのお風呂が付いていた。この小屋は双六岳（小池新道）や笠ヶ岳への登山口として知られている。

わさび平小屋を出発して二〇分で小池新道登山口（標高 1600m）に着き本格的な山登りとなる。この小池新道は北アルプスの新穂高温泉を基点とし、ワサビ平山荘を経て、鏡平を経て弓折岳を経て双六小屋へ至り、三俣蓮華岳～双六岳へ、～槍ヶ岳へ通じる裏銀座コースに接続する登山道の名称で S30 年に小池義清らが開設した。

この周辺では 6～7 月にはマイズルソウ、ニリンソウ、サンカヨウムラサキヤシオツツジ、エンレイソウが見られる。道は大中小の石を敷き詰めた、勾配を登りやすい高さに抑えていてまさに手作りの小池新道だ。秩父沢を経てイタドリヶ原、シシウドヶ原を進むと、熊の踊り場に出た、ここから大小の池塘が増えて、道は木道に変わった。

此のあたりから眼前に槍ヶ岳が見えてきた中岳、南岳も、そして北穂高岳、

奥穂高岳、西穂高岳全部が見えだした。槍ヶ岳の小槍がこの裏側すなわち西から見るとよく見える。山の歌「アルプス一万尺」にも「小槍の上でアルペン踊を踊りましょ！」とある（注参照）。此处は鏡平。双六小屋オーナー先代の小池義清に「池に映る槍、穂高に惹かれて小屋を建てた」とまで言わしめた鏡池だ（標高 2300m）。樋渡氏はみんなが鏡平山荘前広場でワイワイ騒いでいる間、この鏡池で黙々と夕暮れ時の、茜色に染まる逆さ槍と穂高山並群をカメラに撮る。

鏡平山荘から 300m直登する。何回もつづら折りの山道を登る、山の事故は下りで起こる、疲労から石につまずく、滑落すると 100～200m岩混じりの急斜面を落ちることになる。

小池新道の北方向双六岳方面へ、三俣蓮華岳に通じる尾根に出た。反対側南方向に向かえば目の前に笠ヶ岳見えてきた。ワサビ平山荘を出発してようやく 6 時間で三角点のある弓折岳 2592m を登った。

この付近はウラシマツツジやミヤマダイコンソウ、チングルマ、ハクサンイチゲ、コバイケイソウ、ウラジロタデなど植物の葉が赤や黄色に色づき、草紅葉（くさもみじ）がきれい。

弓折岳を経て今日の泊まり鏡平山荘への稜線を行くとき、槍ヶ岳の西斜面が茜色に染まり始める。

与謝蕪村の俳句にちなむ；

「草紅葉、月は槍ヶ岳上、日は笠ヶ岳に」の情景を目の当たりにする。

与謝蕪村は一七一六生れ江戸時代中期の俳人、当時彼はこの北アルプス二六 00 m級の稜線歩きはしていない。

この鏡平山荘は双六小屋、昨夜のワサビ平山荘同様小池新道を開設した先代小池義清で、現在の息子潜ヒソムは双六小屋オーナーで写真家でもある。小屋には彼の大型写真集が並んでいた。登山道の整備状況良さ。両山荘のお客の気持

ちを理解しての対応の良さ（どこかの温泉宿と大違いと指摘するH氏）食事の
おいしさ等に伝統が引きつがれていた。

この辺周辺の各山荘が4日後は閉鎖される、目の前一带の槍、穂高連峰、双
六岳、三俣蓮華岳に通じる尾根、笠ヶ岳等は来月末より半年間は白銀の世界に
変る。

今回は最後のチャンスを捉えた最高の山旅であった。

注 アルプス一万尺

一、アルプス一万尺 小槍の上で

アルペンおどりをさあおどりましょ

ランラララ ララララ

二、お花畑で 昼寝をすれば

蝶々が飛んできて キッスをする

三、一万尺に テントを張れば

星のランプに手が届く

了